

資料3

2016 年度
『学校ボランティア通信』
（横浜キャンパス）

2017 年 1 月 20 日 発行

ボランティア通信

松本中学校

栗田谷中学校

六角橋中学校

神奈川中学校

川崎市立中学校

戸塚高校定時制

小学校外国語活動

白幡小土曜塾

青少年の居場所



JINDAI のびのび学習塾

J I N - K A N A 学習塾

2017 年 1 月 20 日

ボランティア通信

松本中学校



目 次

教員が生徒に与える影響

英語英文学科 3年

原 亜由美

現場で学んだ生徒の実態と関わり方

英語英文学科 4年

原田 亜矢子

教室整備の重要性

英語英文学科 4年

藤木 仁美

教師の支援と生徒間の関わり

人間科学科 3年

笠井 義輝

生徒と関わる時の大切な要素

人間科学科 4年

佐藤 嶺

生徒との接し方

経済学科 2年

阿部 優生



教員が生徒に与える影響

英語英文学科 3年 原 亜由美

松本中学校に4月からお世話になり、生徒の変化を一番感じたのは挨拶を積極的にするようになったことだ。8時からの40分間交通整理として道に立っていると、前期には完全な無視もしくは軽い会釈だった生徒たちが、小聲で挨拶をしたり、元気よく挨拶を返してくれるようになった。また、授業でも会う機会がある中学2年生は慣れてきたのか自分から挨拶をしてくれるようになった。また、挨拶をする生徒が増えた理由としては、職員打合せが終わった後に、校長先生や他の先生方が職員室から出てきて、生徒たちに挨拶をされていたからだと感じた。職員打合せが終わってからのわずかな時間を生徒に接することで、生徒たちが「挨拶」に積極的になったのだと感じた。

教員は日頃の学校生活から生徒に接する態度には気を付けないといけないと感じた。これを受けて、今後のアシスタントティーチャーとしての活動ではより生徒の見本になるのだということを意識して、きちんとした態度で生徒に接していきたいと思う。



現場で学んだ生徒の実態と関わりかた

英語英文学科 4年 原田 亜矢子

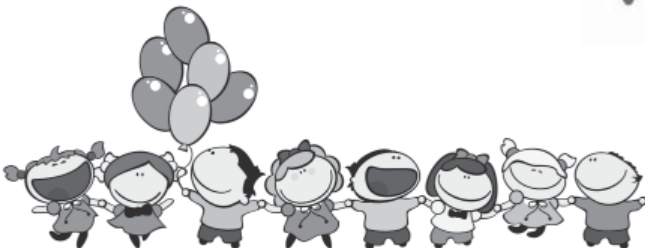
私は今年度から松本中学校でアシスタントティーチャーとして活動させていただいている。前期の活動を通して、授業になかなか集中できない生徒を目にすることがあった。立ち歩きや大声で叫び出すなどの場面に立ち会い、教員としてどのように向き合うべきか考えさせられた。

しかし、後期になると、全学年を通して生徒の様子が落ち着いてきたように感じる。その大きな要因は、先生方の連携した学級運営と、きめ細やかな毎日の指導にあると考える。まず、私が担当している1年生は比較的落ち着いているクラスが多かった。朝の打ち合わせの様子などを見ていると、欠席している生徒やクラスの様子を先生同士で共有する時間があるようだった。自分のクラスだけではなく、学年全体で自分のクラスを見つめることで見えてくることもあるだろう。また、他クラスの様子を把握しておくことで多数の先生で生徒たちを見守り、対応できると考える。同時に、先生方が生徒によく関わっていると感じた。通り過ぎる生徒に挨拶をするだけではなく、何か一言加えて声をかけている先生方が多いと感じた。生徒との関係づくりはすべての学級運営の基本であり、毎日の積み重ねによって信頼関係が築かれていくことを改めて実感した。私は週1回の活動で生徒に関わる時間が少ないので、自分からたくさん声をかけて関わりをもっていきたい。

英語の授業を通して気づいたことは、生徒たちの「英語を話したい」という思いが強いようだという点である。授業中の雰囲気が落ち着かない1年生のクラスに入った時である。このクラスでは、私語がやまない、活動中に何もしない、友だちの解答をそのまま写すなど消極的な様子が目立ってきている。普段の英語の授業では、先生から頻繁に注意されている。しかし、英会話の単位では、用意された

約40の英語の質問をペアと楽しそうに英語で話していた。ATの私に対して、「○○ってなんて言えばいいですか?」と表現を尋ねる生徒もおり、積極的に授業に参加していた。また、ALTの先生による授業の際には、オールイングリッシュの授業であるにもかかわらず、ほとんどの生徒が先生のほうを向いて熱心に話を聞いていた。ALTの先生の、生徒が英語で理解できる話し方や発問の工夫も要因の一つと考えられる。加えて、生徒たちの英語を「話したい」という関心はかなり高いのではないかと考える。生徒たちの興味・関心にあった活動を取り入れることは、授業設計において重要であると感じた。私は4月から群馬県の教員として教壇に立つ。授業を考える時には、英語科についての興味・関心を把握し、それをもとに生徒の「やってみたい!」という前向きな気持ちを基盤にして授業に取り組めるようにしたい。中学校でのATとしての活動は、英語科の授業を研究するだけでなく、生徒の実態を知り、どう関わるか考えることのできる大変貴重な機会である。残りの活動がさらに有意義なものになるように、自分で考えて行動していきたい。

abcdefghijklmnopqrstuvwxyz



教室整備の重要性

英語英文学科 4年 藤木 仁美

私は授業前に教室に入ると、休み時間の生徒の様子を観察すると同時に、無意識のうちに教室の状態をチェックしている。机はきれいに並んでいるか、ごみは落ちていないか、休みの人の席に椅子が上がったままになっていないか、授業に必要ないものが机の上に出ていないかなど、様々なことを見て教室の空気を感じ取る。教室は生徒が一日過ごす場所であるからこそ、良い状態を保つことがとても大切だと感じる。私自身が生徒の時には、教室の状態をそれほど気にしていなかった。しかし、担任はいつもきれいな状態を保てるように指導していた。その指導のおかげで教室環境が良かったため特に気になっていなかったのかもしれない。朝の挨拶や帰り学活の時に机の縦横をそろえるように言われ、繰り返し指導されるうちに言われなくてもきれいな状態を保つことが当たり前になっていたように思う。また、中学校でも高校でも机の配置場所にマジックで印がついていて、ずれているかどうか一目瞭然であり、ずれてもすぐに直せた。少しの工夫で生徒が机を整いやすくできる。

2学年では後期からリュックなどの大きな荷物は机の横に掛けず、ロッカーに置くようになったようだ。これはとても良い試みだと感じた。たくさんの荷物が入ったリュックは通路をふさいでしまい、机間指導がしにくい。先生が近くに来ないようにわざと通路に荷物を置く生徒もいる。これではとても授業がやりにくい。机の横に荷物がなくなったことで、教室全体がすっきりしたように感じた。生徒の気も引き締まっているように思えた。中には面倒くさがって横に荷物を掛けたままになっている生徒もいたが、先生がすかさず声をかけ、ロッカーに置くように言われていた。どのクラスでも、教室がきれいだと気持ちよく一日過ごすことができるという共通認識を持てるようになれば良いと感じた。大半の時間を自分の教室で過ごすわけだから、居心地の良い場所であってほしいと願う。生徒は自分が座っている周囲にしか目がいかないから、教室の整備は教師が率先して指導していくことが必要だと考える。また、生徒は気になることがあったとしてもなかなか言いにくい時も多いだろうと思われるので、教師が全体を見て、必要があれば指導し、皆が良い気分で一日過ごせるよう気配りが大切だ。

しかし、まだ教室の後ろのほうの机は曲がっていたり、余計なものが置いてあったりすることが多いように思う。しかも、そのような机に座っている生徒は授業中に周りの友達と私語をしたり、授業に関係ないことをしたりしている。机をきちんと並べ、必要なもの以外は置かずに整っていれば、そのようなことが減るのではないだろうか。教師が授業開始後すぐに机の上をチェックし、関係ないものはしまうように指示し、授業に向かう姿勢を作ることが必要だと思う。教室整備には生徒の授業態度を変える力がある。



教師の支援と生徒間の関わり

人間科学科 3年 笠井 義輝

私は松本中学校でATをさせてもらい1年になります。去年このレポートを書いた頃はまだ活動を始めて1ヵ月だったので、印象や率直に感じたことしか書けませんでした。この1年間で様々な経験をし、生徒とたくさん関わりを持つことが出来ました。私の担当教科は保健体育であり、体育の時間は生徒と一緒に運動をしたり、アドバイスをしたりと他の教科に比べ関わりを持ちやすいと思います。時にはアシスタントだということを忘れて生徒と競技に熱中してしまうこともあります。生徒との年齢が近いからこそだと感じます。

その中で特に印象に残っている授業は、夏休み前に行われた水泳です。水泳の授業では泳げる生徒と泳げない生徒の個人差がわかりやすく、中には25mを泳ぎきれない生徒もいました。そのような生徒は特に気にかけてアドバイスをしたり、「もう少し！」などの声かけをしたりしましたが、結局泳ぎきることが出来ないまま授業最後の全体でのリレーをすることになりました。その生徒は自分が足を引っ張ってしまうと思い、あまりリレーをすることに対して良い顔はしておらず、私も心配しながら見ていました。しかし、実際にリレーの順番を決めることになると、泳ぎの上手な生徒が中心となってあ

まり得意ではない生徒をフォローできるような順番を考えており、リレーが始まってからもチームみんなが泳ぎきれない生徒を理解し、全体で応援していました。その結果、生徒は何回か足をつきながらも最後まで泳ぎきり、順番をまわすことが出来て、その後もみんなと一緒に他の生徒の応援をしていました。この様子を見ていて、中学生の信頼関係や相手を思いやることについて甘く見ていたことに気がつき、全て教師が生徒のやりやすいように場を設定するのではなく、生徒同士の関わり合いの中から自分たちのやりやすいような形をつくらせることの大切さを感じました。この経験を受けてからは、技術を学習する場面でも単にアドバイスをするのではなく、一度生徒に考えさせるという手順を踏むなど、生徒自身の気づきを大切にするようになりました。今後も生徒の関わりを大事にするとともに、近くで生徒の成長を感じられるような支援をしていきたいです。



生徒と関わる時の大切な要素

人間科学科 4年 佐藤 嶺

横浜市立松本中学校で、今年度の5月にアシスタント・ティーチャーを始めてから半年以上が経過しました。現在、私は、毎週金曜日の午前中に活動をさせていただいています。活動内容は、社会科の授業の補助です。特に、教室の後方から生徒の様子を観察し、個々の生徒への声かけや、グループワークの中でアドバイスをしています。最近では、生徒と話をする機会も少しずつ増えてきたように感じています。生徒に声をかけるとき、私は「どうしたの」、「どんな話をしているの」というように問いかけから始めるように心がけています。生徒によって反応は様々ですが、多くの生徒が「教科書のページがわからない」、「部活の話」などと答えてくれます。その答えに合わせて、「教科書のこのページだよ」、「今は何の時間？」というような言葉をかけていくようにしています。

しかし、活動を重ねていく中で、実際には問いかけだけでは足りないと感じるようになりました。声をかける生徒の中には、無視をする生徒や、反発するような態度を見せる生徒もいるので、うまく声をかけることができていないことがあります。そのような生徒に声をかけすぎること、かえって騒がしくさせてしまったこともあり、優しく声をかけるべきか、強く声をかけるべきか悩む場面もあります。授業を担当する先生の様子を見てみると、そのような生徒には粘り強く対応することや、ここぞという場で初めて声をかけるようにしていることが伺えました。優しく注意することも強く注意することも指導には変わりありませんが、それを使い分けるには、注意する内容と生徒の状態を見極めることが重要なのだと感じています。先生からは、「指導と甘えをしっかりと区別する」、「生徒との信頼関係が重要」というアドバイスをいただきました。活動するときの軸をはっきりと持ったうえで、生徒と関わっていききたいと思います。今の私は未熟で、教師になるためには、力が不足しているのを痛感しています。だからこそ、活動から得るものは非常に大きいものだと感じています。それは声のかけ方だ方の授業からは、同じ範囲の授業でも、学級に合わせた授業展開をしたり、教材研究に力を入れたりすることで、生徒が授業に興味をもつように日々工夫を加えていることを学びました。教壇に自らが立つとき

には、活動からの学びや経験を生かしていきたいと感じています。

毎回、松本中学校で活動させていただくときは、生徒の登校時間に校門前の横断歩道に立って、交通指導もさせていただいています。そのときに生徒と顔を合わせて挨拶をすることで、少しずつ生徒との距離感がつかめるようになったと感じています。声かけだけで生徒が心を開いてくれるわけではありません。様々な場面を通して、地道に生徒と関わるのが重要なのだと実感しました。これからも活動の中で、松本中学校の先生方がどのように生徒と関わっているのかを学び、自分自身の指導力を向上させていきたいと思います。



生徒との接し方

経済学科 2年 阿部 優生

松本中学校で、昨年度の10月からATとして活動を行っている。ATとして活動を行う事により、普段の座学では決して得られない経験が出来ていると感じている。ATの活動として、基本的には社会の授業を見させていただき、また、机間指導を行っている。

ATを通して、1番学んでいることは、生徒との接し方についてである。ATとして活動を始めた最初の頃は、生徒とのコミュニケーションの取り方がわからず、生徒とあまり話す機会を作れなかった。しかし、コミュニケーションを取らずに、指導することは、生徒との信頼関係を築くことができないために、注意を聞き入れてもらえないことが多い。そこで、先生方の普段の生徒の指導や接し方を見て、どのようにコミュニケーションを取っていくべきかを学んでいった。例えば、生徒が興味のあるような話題を話す事や、身近な話題から会話を発展させていくことや、その日の生徒一人一人の様子を見て、接し方を変えていたと感じる。また、生徒が授業時間を過ぎているのに、教室に入らなかった時、先生方は厳しく叱るのではなく、生徒一人一人と会話しながら授業に参加するように促したり、参加したくない理由を聞きながら、時にはそっと近くで見守っていた。生徒との接する時には、生徒一人一人の個性によって接し方や対応を変えていくことが重要であると感じた。

次に、コミュニケーションをする際には、生徒と平等に接することが一番大事であると感じた。実際に、平等に接することは難しい事であると感じる。しかし、1人の生徒ばかりに会話をした場合、他の生徒からの批判や不満が高まる恐れがあると感じ、同時に他の生徒の変化に気づくことができにくいと感じた。教員は常に視野を広げ生徒一人一人を観察していくことも重要であると感じた。そして、自分自身が、先生の生徒との接し方を間近に見ることによって成長することができたと感じている。実際に、コミュニケーションの方法を変え、積極的に話しかけた結果、以前より生徒とコミュニケーションをしっかりと取ることができたと感じる。また、コミュニケーションを取ることが出来るようになってから生徒が注意を聞いてくれるようになったと感じている。

また、挨拶運動を行う際に、以前と比べると、挨拶をする生徒の割合が増えてきていると感じている。普段から、挨拶を生徒に対して行うことが、生徒の挨拶を行う意識が変わり、挨拶をしてくれるようになったのではないかと感じる。つまり、AT活動を通して、日ごろの小さな積み重ねが重要であると感じた。ATとして活動を行って約一年経ったが、これからもATの活動を通してより良い経験を積んで行きたいと思う。



発行日：2017年1月20日

発行場所：神大ユース・サポート・プロジェクト（JYSP）

TEL：045－481－5661（内線4352）

FAX：045－413－4154

E-mail：jysp-jimukyoku@knagawa-u.ac.jp

栗田谷中学校



目次

集大成

科目等履修生 岩崎 寛之

集大成 経済学科 科目等履修生 岩崎 寛之
生徒が学習しやすい環境とは 英語英文学科 4年 滝沢 菜葉
教員として重要なことは 英語英文学科 3年 岡崎 玲奈
実際の中学校を見て 機械工学科 3年 小林 和貴
生徒理解 法律学科 2年 井倉 真昼
生徒から学んだこと 人間科学科 2年 岡本 大希
当たり前じゃないこと 経済学科 1年 長浜 詩菜

私は昨年(2015)の11月からアシスタントティーチャー(AT)を始めました。活動を始めて約1年の月日が経ちました。しかし、そのATの活動も今年度いっぱい(2016)で終了する予定です。そこで今回のレポートではこの1年間の活動を通じて学んだこと、そして活動を終えるにあたって後悔していることを書き残したいと思います。

私がこの1年間で学んだことは数多くありますが、最も学んだことは「先生は生徒にどう成長してほしいのか」を明確に持つことです。先生にはそれぞれ特徴があり色があります。その先生の特徴や色はどこからくるのか、私なりに考えました。その結果「生徒をどう成長させたいか」という信念からくることだと思いました。そこで私は1年間のAT活動を経て、生徒にどう成長してほしいのか考えてみました。私は生徒に“他人を思いやる心”と“集団のなかで自分の色を出す力”この2点を育みたいと考えます。そのために生徒を理解することや生徒の心に寄り添う指導、善悪をはっきりとすることなど教師にとって大切なものを忘れないようにしたいと思います。

その他にも、生徒に話を聞かせるためにはどのような工夫をするべきか学びました。感情的になり怒鳴るだけでは生徒の心には響かないことも気付きました。また、中学生の年頃は反抗期でもあります。些細なことで生徒同士がぶつかる事もあります。そのときに教師は全てにおいて介入するのではなく、生徒同士で考えさせ自分たちで解決の道を探すことも大切な力と学ぶことができました。

次に後悔していることは「話しかける生徒に偏りがあった」ことです。授業中の私の仕事は寝ている生徒やボーっとしている生徒、勉強の追い付かない生徒たちを補助していくことです。しかし、休み時間や放課後は違います。生徒たちの様子を見守りつつ、私もさまざまな生徒と会話をする時間があります。ほとんどが他愛もない話ですが、勉強をしなればいけない毎日のなかでそれが生徒にとって心の安らぎになるのかもしれませんが、この時間に関わる生徒たちに偏りがあったと感じ、それがなければもっと多くの生徒と話すことができたのではないかと今は思います。授業中も私のやらなければいけないことはありますが、合間でもっと多くの生徒の様子も見ることができたと思います。このことに後悔はしていますが、まだ3月まで残された時間があります。出来る限り多くの生徒と話すことを心掛け、残りの活動も無駄のないようにしていきたいと考えます。

このレポートに記載できることは私が学んだことの一部です。ATの活動は1年間でしたが、今年度から週に2日(全日)で行っていたため本当に多くの事を学ぶことができました。また、学校現場に入っていなければ気づくことができなかったことも多くあります。そして、ATの活動は私自身がどんな教員になりたいか考えるきっかけとなりました。このような機会を設けて頂いた大学、そして快くATを受け入れて頂いた栗田谷中学校に感謝し、この期間で学んだことを大切に、次のステージに行きたいと思います。栗田谷中学校の先生方、そして生徒たち本当にありがとうございました。

生徒が学習しやすい環境とは

英語英文学科 4年 滝沢 葉菜

私にとって学生生活最後のアシスタント・ティーチャー(以下、AT)の活動となる今期、生徒が学習に取り組みやすい環境について考えることが多くなりました。きっかけは、勉強が苦手な生徒に対する、周りの生徒たちの接し方に違和感を覚えたことでした。教室の中には様々な個性を持った子どもがいて、皆同じではありません。性格も能力も家庭環境も異なります。このように、異なった子どもたちが集まる教室の中で、どのようにしたら皆が安心して学習に取り組むことができるのか、私の考えを述べていきます。

まず私が大切だと考えるのは、教室にいる生徒が皆同じわけではないと、教師が意識することです。そして、その意識を生徒にも広げていくことが必要だと考えます。以前、授業中のペア活動で、勉強が苦手な生徒とペアになった生徒が嫌そうにしているのを見ました。また、「こんなことも分からないなんてヤバイよ。」と勉強が苦手な生徒に対して言っている生徒を見たこともあります。教室にいるのが自分と似たような人だけだと思ってしまうと、このように自分と異なる人を攻撃してしまうと思うのです。もちろん、勉強が苦手な生徒が、机に突っ伏すなどやる気がないと捉えられるような態度をとっていたことも問題です。しかし、その生徒は授業についていくことができないために、そのような態度をとってしまうと考えられます。クラスの中に、自分とは違う生徒がいるということ、そして自分ができることをできなくて困っている生徒がいるかもしれないということを少しでも意識できれば、攻撃するのではなく、手を差し伸べることができるようになるのではないのでしょうか。もしそうなれば、教室の中が、皆が安心して学ぶことのできる空間になると思います。

次に大切だと思うことが、学び合いです。栗田谷中学校にATとして行かせていただき、授業の中で、勉強が苦手な生徒に他の生徒が教えるということをしていると気付きました。勉強が苦手な生徒は、教えてもらうことで授業の内容が理解できるようになります。一方で、教える側の生徒は、人に教えることで自分の理解度を確認することができますし、自分の自信にもつながると思い

ます。そして、この学び合いによって、お互いのことをより理解することもできると思います。例えば、お互いに、「自分にできないことができて凄い」と思うことができたり、「今まで〇〇さんにはこんなことできないだろうと思っていたけれどできるんだ」と思うことができたりするかもしれません。人間関係をより良いものにするためにも、教師対生徒の学習だけでなく、生徒対生徒の学習が大切だと思います。

ATの活動を通して、将来どのような教師になりたいか、どのような学級を作りたいかということが、より明確になりました。実際に学校現場に出たら、仕事に追われる日々になるかもしれませんが、生徒のことを第一に考えることは忘れないようにしたいです。そして、様々な生徒がいることを意識し、皆が安心して過ごすことができる学級を作りたいです。



教員として重要なことは

英語英文学科 3年 岡崎 玲奈

私が栗田谷中学校でアシスタント・ティーチャー(以下:AT)を始めたのは、昨年10月のことです。始めた理由としては、自分の将来について考える上で、ATとしての活動が決め手になるのではないかと考えたからです。というのも、私は3年間教職課程を履修してきても未だ教員になるかを決めかねており、自分の歩むべき道がわかりませんでした。そんな自分から変わるために、ATを始めたのです。活動としてはまだ両手に収まるほどの回数しか行っていませんが、これまでの活動で既に多くの学びを得られ、学校ボランティアに参加させていただけることのありがたみを日々感じています。これまでの活動で私が学び、教員として重要だと感じてきたこと、そして今後の課題について以下に記します。

まず、ATの活動を通して「自分から心を開く」ことの重要性を学びました。学校ボランティアの経験がなかった私にとって「AT」として中学校に行くということは、未知の世界でした。初めのうちはどのように生徒と関われば良いのかわからず、生徒と話すことに対してとても消極的でした。どうしても、「話しかけたら嫌がられるのではないか」ということが頭によぎってしまい、誰にも話しかけられないまま、掲示物を見て10分休みを乗り越えることもしばしばありました。しかし、そのままではいけない。「自分から心を開いて、恐れず積極的に生徒に話しかけてみよう」と決めました。そう心がけ始めた日からは、少しずつではありますが生徒との会話も増え、私のことを認識してもらえるようになりました。今では生徒の方から声をかけてもらうことや授業中に質問されることも多くなり、とても嬉しく感じています。

次に、先生と生徒との関係作りについて学びました。担任の先生は学活や総合などの時間はもちろん、教科の時間にもより多くの生徒と会話されているし、一人一人に目を向けています。私はATとしてでさえクラス全員を見られていないのに、先生方はそれを毎時間行われており、尊敬します。自分が教員になった時に困らないためにも、より多くの生徒の顔と名前を一致させ、その生徒がどんな子なのかを知っていく練習をしたいと思います。

加えて、授業中に生徒が授業と関係のない作業をしているときや寝ているときなどの先生方の指導の仕方も勉強になります。私はATなので先生方と同じ立場ではありませんが、少しでも生徒に頼られるような、ATとして相応しい関わり方を心がけていきます。

始めの頃に比べ、環境に少しずつ慣れてはきましたが、まだまだ課題はたくさんあります。今最も課題であると感じているのは、「特定の生徒とばかり話すことから脱却すること」です。自分でも「より多くの生徒と関わろう」と決めてはいるけれど、なかなか行動が伴わないのが現実です。親しくなれた生徒がいるとどうしてもその子に頼ってしまうので、今後は既に話したことのある生徒も大切に、新たな生徒と関わる努力をしています。

私はこれまでのATの活動を通して、先生方や生徒の皆さん、そして同じATの皆さんから大変良い刺激を受けてきました。今後の活動に関しても毎回具体的な目的を持ち、一日一日を大切に過ごし、そして教員として重要な多くのことを吸収していきます。

実際の中学校を見て

機械工学科 3年 小林 和貴

昨年10月からATとして、栗田谷中学校にお世話になっています。ATをすること自体初めての経験であり、先生方の授業や動き、生徒の様子の一つ一つは将来教職に就きたいと考えている私にとって、勉強になる事ばかりです。

私は、数学の授業のサポートとして、2人の先生方の授業を拝見する機会があります。比べるのもおこがましいかもしれませんが、私の模擬授業とは天と地の差でした。教える能力、知識が足りないのに加え生徒を前にして授業をすることをしっかりと考えられていなかったのではないかと思います。ほかの授業でもそうかもしれませんが、数学の授業では特に、できる、できないというのが生徒によって出てきてしまいます。しかし、実際の生徒と接してみて、40人くらいの教室でここまで数学のできる、できないに関して差が離れているのかと驚くばかりでした。また、わからない生徒は、「わからない」を解決しようとするのではなく、そのままにしてしまったり、それを伝えられなかったりすることがあります。先生方が尋ねて「ここがわからない」とやっと伝えることができる生徒もいます。

先生方は生徒同士で教えあう時間をつくったり、机間指導のときに苦手な生徒の様子を見に行ったりと様々な工夫をされていました。



自分自身が授業をしたらどうしようとするのもそうなのですが、それとは別に、私がATとしてできることは何だろうかと考えました。それは、生徒からいつでも質問ができるような立ち位置にいることだと思います。ATとして当たり前なのかもしれませんが、意外に難しいことで、生徒との信頼関係や質問の対応を意識しなくてははいけません。ATとして活動を始めた当初は向こうから話しかけてくることも少なく、あまり、コミュニケーションをとることはできませんでした。しかし、少しずつ話しかけていく中で、少しずつ話してくれるようになりました。また、数学の時間も、最初はこちらから、「これわかる」という質問していましたが、少しずつ「ここわからない」と言ってくれるようになりました。栗田谷中学校の生徒はATの学生が良く来る環境の中で学習をしているので、ATに質問すること自体が慣れていたのかもしれませんが。例えそうだったとしても、頼ってもらえたことはとてもうれしく、ATの活動自体にもやりがいを見つけた気がしました。しかし、生徒全員と話しができていく訳ではありません。これから、少しずつ話しかけていきたいと思えます。また、私自身に慣れてきたのか、授業中にも友達感覚で接せられることがあります。慣れてくれたという良い点がある反面、メリハリがなくなったという悪い点もあります。上手く付き合っていくということが良い答えなのかもしれませんが、私は、まだそれが見つけられていません。少なくとも、勉強の邪魔になることはないように、生徒の接し方を考えていければよいのかな、と思います。

生徒理解

法律学科 2年 井倉 真昼

私は、昨年度の10月から栗田谷中学校でATをさせていただいており、活動を始めてから1年以上が経過しました。授業中の机間指導をはじめ、特別支援学級のサポートや、学校行事のお手伝いなど、学校現場のさまざまな場面に携わらせていただくことで、生徒の成長はもちろんのこと、自分自身の成長も少しずつ感じ取ることができてきています。

前期の活動では、1年生の頃になかなか進んで積極的にできなかった授業中の机間指導に力を入れようと活動してきました。その結果、進んで生徒への声掛けはできるようになったものの、机間指導をしなければならないということではいっばいになり、授業中には、いつも同じ生徒ばかりに目がいつてしまっているということに気づかされました。このことを通して、後期の活動では、生徒の良いところを見つけること、そしてクラス全体を見ることを心掛けて活動をしています。

私は、社会科のATなのでよく社会科の授業に入らせていただいています。目標を掲げたからには行動に移そうと、前期のように一定の生徒に目を向けないようにクラス全体を見て教室を廻るようにしています。後ろから見ていただけでは、机に向かっているように見えていても、実は手が止まっていたり、教科書のページが違うページを開いていたりと、いつも目を向けていた生徒以外にも自分が声掛けをするべき生徒はいました。ある時は、先生が社会科に関連させた雑談をしていて、多くの生徒は手を止めて先生のお話を聞いている時、ひとり手を動かしている生徒がいました。何を書いているのか見に行くと、その先生が仰っている雑談をプリントの隅にメモをしていました。その生徒には、授業が終わった後に、「先生のあのお話メモしていた子他にいなかったよ〜、すごいね〜」と声を掛け、褒めることをしました。それから、その生徒が社会科に興味があること、社会科系のテレビを見ていることも知ることができました。教室を廻って見ることで、さまざまな生徒の動きや反応、良いところまで見つけられるということがわかり、生徒を知るきっかけとなるコミュニケーションにも繋がりました。クラス全体を見て、生徒の良いところを見つけるといことができるようになってきました。しかし、入るクラスや教科によっては、まだ一定の生徒に目が行きがちなところがあります。将来、教員として学校現場に入った時、私にとっての生徒は一人ではありません。クラスの一人ひとりを見ることはとても大切なことであり、これからも強く意識していくべきことであると考えています。

そして、生徒をもっともっと知ることが必要であると感じています。机間指導中の声掛けにしても、あまり信頼関係がなっていない状態で注意をしてはうまく行き届くことはなく、良いところを見つけてそれを褒めるときにしても、コミュニケーションは深まりません。例えば、生徒の名前を呼ぶことで、私の存在への意識や信頼関係に繋がると思います。クラス全体を見ることに加え、生徒一人ひとりの名前や個性を知ること新たな目標にし、これからの活動をしていきたいと思っています。



生徒から学んだこと

人間科学部 2年 岡本 大希

私は2年生の4月から栗田谷中でAT活動を始めて、現在8ヵ月目になりました。その期間で多くの生徒と接して様々なことを学べましたが、今一番印象に残っているのは「上手いかわなくても相手のことを想って一生懸命に行動すれば、その気持ちは自然と相手（生徒）に伝わって何か変わるんだな」ということです。

私がボランティアをやっていると思う出来事がありました。それは教科書を出さずにノートも一切取らない生徒にマンツーマンで対応していたときです。最初は声をかけても無視したり、「とりあえず教科書だけでも出そうよ」と言っても「めんどくさい」の一点張りという状況でした。ですが、先生から質問をされると自分なりの面白い考えを発言したり、話してみるといろいろな知識を知っているということがわかりました。また、休み時間になると向こうから遊びに来たりと仲は良いという状態だったので、あきらめず何かしら行動すれば変わると思っていました。そこで、今まで授業中はマンツーマンで対応していたものを授業前に「今日はずっとはいないから授業だけは聞いてろよ。寝てたら起こしに

来るから」というような内容を伝えてあとは後ろで見守るように変えました。理由は、いつもマンツーマンで隣にいとこの生徒が周りから「あいつは先生の手がかかるやつだ。何で先生があんなに言ってるのにやらないんだよ」と思われて友達からの評価が下がってしまうのではと思ったこと。また、「何で俺ばかり」となって余計に授業に参加しないのではと思ったからです。それに加え、休み時間でも以前はその生徒と接している時間が多かったのですが、他の生徒とも多く関わるようにしました。そして、その生徒には教科書・ノートを使いながら授業を受けるように言葉をかけ、その生徒ばかり接するという時間を少なくするよう心がけました。

最初はあまり効果が出ませんでした。しかし、最近になってやっと教科書を机の上に出すようになったり、授業中はほとんど寝ずに、先生の質問には積極的に発言するようになってきました。本当に徐々にですが、変わってきている姿を見てすべてが自分の効果とは言えませんが非常にうれしかったです。こういったことが教員という仕事の一番のやりがいなのかということを実感しました。このような体験をさせてくれたAT活動やその生徒には感謝しています。また、自分が相手のことを想いながら一生懸命に行動すれば相手は変わるし、すべては自分次第だなということをAT活動の中で再確認できました。これからのAT活動でもこの姿勢を忘れずに根気強く生徒と接していきたいと思っています。



当たり前じゃないこと

経済学科 1年 長浜 詩菜

栗田谷中学校で後期からアシスタントティーチャーとして活動し始めました。まだ数えるばかりしか活動ができていませんが、初めて生徒でも先生でもない立場として授業中教室に入らせていただき、気が付いたことがいくつかありました。そのうちの一つは、自分にとっての当たり前は誰もが当たり前だと思っているわけではないということです。

1年生の社会科の授業に入らせていただいた際に、ノートをなかなかとらない生徒の傍につくことになりました。その生徒がノートを取るように促しながら授業に対する姿勢を見ていましたが、授業中に他の生徒と雑談をするわけでも、居眠りをするわけでもなく、先生の話を中心に聞いていて問いかけに対しては積極的に発言をしており、授業に真剣に取り組んでいました。授業中に先生が太文字に下線を引いてみようと言った時には板書を写すと言った時には板書を写していましたが、先生が書きながら話していると、その生徒は書きながら聞くということができず、話を聞く方にだけ意識がいきってしまい、結果的にノートを取らないこと繋がっていました。他の生徒は先生が話しながら板書を書いているのを見ながらノートに写すことができていました。板書を写すことは当たり前のことだと思っていましたが、その生徒にとっては書くことよりも聞くことの方が大切なのだなと思いました。だからと言ってテスト前にテスト範囲を見直したりするためにも板書をきちんと写すことは必要なことだと思います。

私が生徒の傍にいた日は結局ノートを写し終わる前に休み時間になってしまい授業が終わったら写すのをやめてしまいました。その生徒にどう接すればよいかわかりませんでしたが、授業にやる気がないわけではない様子でした。先生方にそのような生徒がいたらどうするのかなど尋ね、どうすれば生徒がノートを取ってくれるかなど今後の課題にしていきたいです。

今回、活動を振り返ってみて今までの活動は生徒と上手くコミュニケーションを取ることができなかったり、ただ授業を聞いているだけになってしまったり、とても満足できるものではありませんでした。生徒と少しずつでも信頼関係を築いていき、当たり前なことではないということに気が付けたので物事を多角的にとらえ、先生方は問題が起きたときにどう対応しているのかよく観察していきたいです。また、アシスタントティーチャーができるというのはとても貴重なことだと思うので、学校に行っただけ授業に入ることに満足するのではなく、活動の中身を意味あるものにするためにも目的をしっかりと持ってこれからの活動に取り組んでいこうと思います。



発行日:2017年1月20日

発行場所:神大ユース・サポート・プロジェクト(JYSP)

TEL:045-481-5661(内線 4352)

FAX:045-413-4154

E-mail: jyssp-jimukyoku@kanagawa-u.ac.jp

学校ボランティア通信

～六角橋中学校～

目次
今の私にできること
英語英文学科
4 年 清水 浩平
生徒を見つめる目
英語英文学科
4 年 駒崎 達也
考えすぎないこと
経済学科
3 年 山梨 優
目を見る、目を合わせる
英語英文学科
3 年 吉田 真悠子
生徒のために
人間科学科
3 年 船木 滢
特別支援学級における
「生徒理解」
人間科学科
3 年 吉村 涼
授業見学を通して
電気電子情報工学科
3 年 宮田 修斗

今の私にできること

英語英文学科 4年 清水 浩平

個別支援学級でのアシスタント・ティーチャーの活動を始めて、半年以上が経ちました。毎週火曜日という限られた時間ではありますが、生徒の特徴を頭に入れながら、自分の役割を考えて行動することが多くなりました。

学習室の生徒は2クラスに分かれ、学習をしています。教室には学年の違う、様々な生徒がいるため、1日の動きは毎回少しずつ変わります。また、常に複数の教師が学習を行うため、学生も学習室の先生に言われたことをするだけではなく、自分で考えて行動することが大切です。どうしたらよいのか分からず困ることもありますが、その分やりがいもあり、私も生徒から学んでいるという実感があります。

私が特に意識をして取り組んでいることは、生徒への「言葉かけ」です。ある日、私はHさんと一緒に国語の時間にペン習字を練習しました。机にじっと座って50分間学習するのはなかなか難しい生徒ですが、毎回「プリント〇枚は一緒に頑張ろう」と言って学習をしています。普段の様子を見ていると、字を書くときに大きさを意識したり、丁寧に書いたりすることが少ない生徒だと感じていたため、その時間は始める前に「丁寧に書こう」と伝え、上手に書けたときは「今の字は丁寧に書けていたね」と声をかけようと自分の中で決めて、実際にその声かけをしながら一緒に取り組みました。その時間は3枚のプリントにひらがなを練習しましたが、どのプリントを見せに行っても先生から「上手に書けたね」と褒められました。Hさんも嬉しそうにその後の時間を過ごしていたので、一緒に学習をした私も嬉しくなりました。

字を練習する場面で、「丁寧に書こう」ということ自体は特別なことではありません。しかし、今振り返ってみると、「上手に書けるようになってほしい」と心から願い、そのためにどうすればよいのか考えて言葉かけをしたからこそ、生徒にもその気持ちが伝わったのかもしれない。また、今回のケースだけではなく、生徒と関わる全ての場面で、どうしたら生徒が成長できるか、どうしたら生徒が自分の力で考えて行動できるか考えることが重要だと考えます。

生徒は毎日、様々な面で成長しています。その成長を近くで感じられることに喜びを感じるとともに、貴重な生徒の学びの時間に関わっているということに責任を持って活動することが大切だと、アシスタント・ティーチャーの活動を通して学びました。また、生徒でもない、教師でもない私が生徒にできることは何か悩み、考えながら行動しているこの経験は、教師になったときに必ず生かせると信じています。活動できる時間は残り少なくなりましたが、最後まで自分のできることを精一杯やる中で、自分自身も成長していけるよう、これからも努力していきます。

生徒を見つめる目

英語英文学科 4年 駒崎 達也

六角橋中学校でアシスタントティーチャーとしてボランティアを始めて、たくさんの経験をしました。ボランティアを始めた当初は、英語の授業を中心に活動ができればいいなという思いがありましたが、個別支援学級を中心に今まで見てきました。活動を進めていくうちに、その面白さがわかってきたと思っています。

最初に感じたことは、いろいろな生徒がいるということでした。自分自身の中学生生活を振り返っても、授業中に教室を飛び出したり、歌を歌いだしたりする生徒はいませんでした。そのようなことは、多少はボランティアが始まる前から想像していましたが、いざ目の前でことが起きると驚き、戸惑っていました。しかし、それもすぐに慣れていきました。その時強く思ったことは、いろいろな生徒がい

るから、彼らに合った接し方で対応しないとイケない、ということでした。

また、様々な生徒がいる中で重要だと思ったことが「見つめる」ということです。生徒は目と目を合わせて話すと、「あなたと真剣に話しています」という気持ちが伝わるとい、生徒と話するときはこのことを心がけています。実際に目を見て話すと、ニコッと笑ったり、返事をしたりする生徒がいます。そして、「見つめる」ということはただ目を合わせるだけでなく、生徒がどんな生徒なのかをよく見て「判断する」ということでもあると思っています。この「見つめる」ことが生徒に寄り添うということにおいて重要だと思います。どんな生徒なのかを把握して、適切だと思われる対応で接することに繋がります。

私は11月に神奈川区の合同宿泊体験に参加し、「愛川ふれあいの村」に行きました。私は六角橋中学校と一緒に学習しているSさんを担当することになりました。Sさんは授業中に飛びだしてしまうような生徒なので、活動をしている最中にどこかに行かないように見ていました。二日目の活動で、グループになってフリスビーをするという活動がありましたが、Sさんはずっとやりたくないと言っていました。先生方からも、無理にやらせなくていい、無理にやらせると飛び出して行ってしまうと言われていたので、Sさんがしたいことをやっていました。みんながフリスビーをしている中、広場で鬼ごっこやおんぶをして遊びました。Sさんは体験学習が終わった後、私との思い出を作文に書きました。その思い出は私にとっても思い出になり、作文に書いてくれたことはとても嬉しかったです。生徒にとっても何が重要か判断することはとても難しいですが、今回のように生徒が生き生きと過ごせたことはとてもよかったと思っています。

六角橋中学校でボランティアをして、新しく発見した「生徒を見つめる目」をこれからも大事にしていきたいと思っています。



考えすぎないこと

経済学科 3年 山梨 優

アシスタントティーチャーを初めてもうすぐ1年が経とうとしています。この1年間で生徒、現職の先生方、アシスタントティーチャーを共に行う仲間からたくさんのことを学びました。特に生徒が私にもたらした学びは、とても大きなものだと思います。また、個別支援学級に関心のなかった私が、個別支援学級で過ごしたこの1年間は特別なものでした。そして、この1年間の活動が私にもたらした一つの答えが「考えすぎないこと」です。

前期の活動では、特別視してしまう自分の未熟さに悩みました。個別支援級の生徒が何かできないことがあると可哀想だと思い、そういう点で無意識に特別視をしてしまい、そのことが私の最大の課題だと気づきました。そのことを踏まえ、後期の活動では特別視をせず生徒と素直に接せられるようにしたいと思い、後期の活動を始めました。

前期の活動を振り返ったことで生徒を可哀想だと特別視してしまうということは比較的少なく、それほど後期の活動では問題だと感じませんでした。しかし、後期の活動では新たな課題が生じてしまいました。それは、考えすぎてしまうということです。無意識に特別視をしてしまった時や生徒への一つ一つの言葉、どこから支援をしてどこまでは隣で見守るかなど、様々な場面で考えることが多くなってしまいました。言葉の一つ一つや生徒に支援をするタイミングなどを考えることは、きっと悪いことではありません。むしろ教師として教育を行っていく上では大切なことだと思います。しかしながら、私の活動においては、考えすぎてしまうということが大きな課題でした。なぜなら行動することに最善の対応を考えてしまい、一つ一つの行動や支援がスムーズに行えずタイミングを逃してしまうということがあったからです。たとえ最善策を考えたとしても、実際に何もできなければ意味がありません。これでは、決して良い対応ができなかったとしても何かしらのアクションを起こした方が良い結果になってしまいます。このことに気づいたとき、私はあまり考えすぎず自分の気持ちに素直に行動しようと思いました。そして、あまり考えすぎずに素直に行動してみると、以前よりも生徒達とも距離が縮まり、活動中の気持ちも軽くなりました。常に考えるということが必ずしも正しいということではないという

ことに気づきました。この経験こそがこの1年間で私を成長させたことです。

今後も私は学校ボランティアを続けていこうと思っています。その過程において考えすぎないということ意識しながら、より効果的・効率的な支援を行なっていきたいです。

目を見る、目を合わせる

英語英文学科 3年 吉田 真悠子

私は、六角橋中学校に週に1日、特別支援教育のアシスタントティーチャーとしてお世話になっています。学校に行く回数を重ねるごとに生徒との距離が縮まり、今では月曜日に学校に行くことが楽しみになっています。

生徒から、先生方から、そして教育の現場そのものから毎日多くのことを学ばせていただいています。始めたばかりの時は戸惑うことが多く自分の無力さを情けなく感じ、“ただの邪魔になっているのではないか”と考えました。しかし、先生方から「あなたの勉強になればそれでいいよ」と温かい言葉をいただきました。だから、今日まで続けられていると思い感謝しています。

“個別支援教育”はこれまで経験したことがないどころか、見たこともありませんでした。教室には、授業中じっとしていられず立ち歩いてしまう生徒、ちょっとしたことからパニックになり大声を出してしまう生徒や、私がしっかりしなくてはと言わんばかりに周りに気を配りお世話をしてくれる生徒など、様々な個性を持つ生徒がいます。一人ひとりが愛おしく、ハイタッチして教室を出るときには、“まだ教室に居たい”と思っている自分がいます。私が特に一緒にいる生徒Hさんは、授業中50分はもちろんのこと、朝の学活中の数分も椅子に座り続けることが難しいです。隣に座っている私の体や手足を乗り越え、立ち上がっていつてしまうことも少なくありませんでした。しかし、最近は授業中も座り続けることができる時間が伸びてきたように感じています。絵の具を触った手で触られて洋服が黒くなったり、鼻をほじった手で触られたり、そんなことは日常茶飯事です。全てが愛おしく“この生徒たちの卒業の日が見たい”と思い共に学習しています。

集中力が切れた時には生徒2人と隣の部屋で本を読んだり、工作したり、音楽を聴いたりしています。その時間はたくさん笑顔で話しかけ、たくさん褒めて、コミュニケーションを取る時間になっています。そして私は、その生徒が自分の好きなことができる時間の笑顔がとても好きです。

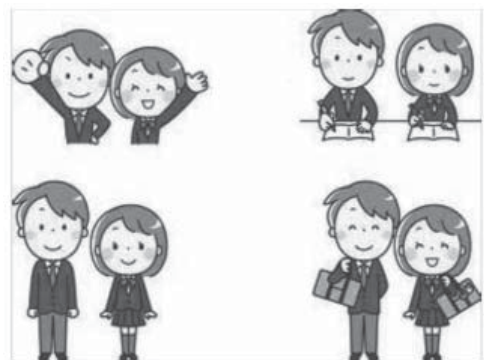
アシスタントティーチャーを始めた当初から、生徒の目を見て話すことを心掛けてきました。そして、最近には、先生方が叱る時にも目を見て表情を変えて叱っているのを見て、叱り方も学ばせていただきました。私は叱るということが苦手です。しかし、“その生徒の誤った行動を正したいと思うなら叱れるはずだ”という助言をいただき、生徒が誤った行動をしたら曖昧に言うのではなく目を見てしっかりと伝えるようになりました。そしてその分、行動が改善された時には、生徒の目を見て満面の笑みで褒めます。それが、Hさんの座わっていられる時間が伸びたことに少しでも関わっていたら嬉しいです。

生徒のために

人間科学科 3年 船木 澤

私は今年の5月から週に一回、六角橋中学校で学習室という特別支援学級のアシスタントティーチャーをしています。2学期のボランティアは、体調不良や自身の都合などで1・2週間おきでしか行けない事が多々ありました。私は久しぶりに行く度に学習室の子どもたちと距離が生まれてしないか不安でした。しかし、続々と登校してくる生徒たちは毎回いつも通りの態度、私が髪を切ったなど細かいところにも気づいてくれたことに毎回喜びを覚えています。他にも、指相撲の勝負をし合ってきたり、「あのね、あのね」といったように自分の話をしたりする生徒がいて「好かれているのかな」と思える様になりました。先日、先生に「子どもたちは意外と覚えているんですよ。〇〇先生は全然来ないとか——。」と聞きました。私たちが普段何気なく過ごしている中での行動や発言は子どもたちの中ではしっかり記憶されているのだと実感し、これからはいつも以上に軽卒・適当な行動や発言を慎まなければいけないと思いました。

私は叱るべきか見過ごすべきかの判断がまだ分かりません。「特別支援学級だから」という理由で多少の悪い事を注意せず見過ごしてしまうことが何度かありました。そう思ったきっかけは、私が国語の時間に、Sさんを見ていたときでした。授業の内容としては、何個かある語句を、「動きを表す言葉」、「様子を表す言葉」、「名前を表す言葉」にそれぞれ分類するということをしていました。これらには3〜4個の語句が入るものに、Sさんは枠にはみ出してしまうほど大きく、他の語句が入らないように書いてしまいました。それに対して私は大して問題は無いと思い、見過ごしました。すると、先生はそのことに対してSさんに「それじゃあ書けないでしょう。なんで紙を無駄にするようなことをするの。」と少し強めに叱ったのです。その光景を見て私は「しょうがないで済ましていいことなどない」と当たり前のことに気づかされました。たしかに、許される部分はあるとは思いますが、最初から許すのではなく、「してはいけないこと」を生徒にきちんと伝えなければ、生徒のためにならないと思いました。この前のカンファレンスでは注意や叱ることについて話し合いました。私も注意することは苦手としていますが、生徒のためになるのならば、自分の「苦手」という気持ちよりも生徒のためを思う気持ちを強くもって行動が出来るになりたいです。



特別支援学級における「生徒理解」

人間科学科 3年 吉村 涼

私はアシスタントティーチャーとして、後期から横浜市立六角橋中学校で活動を行いました。主な活動としては、個別支援学級において生徒への学習面や生活面での支援です。この活動の中で、生徒たちの発言・行動から教員の支援の方法等、様々なことを学ぶことができました。その中でも特に、「生徒理解」という点について深く印象に残っています。この「生徒理解」について、活動から学んだことを「生徒理解」の重要性という視点と、求められる教員像という視点から述べていきます。

まず、「生徒理解」の重要性についてです。これは個別支援学級の担任教員の方の、生徒への関わり方や、その方との話から学ぶことができました。その担任教員の話では、「生徒は意味のない行動はしない。言葉にして伝えることが難しいから行動で示している。」ということをおっしゃってくださいました。私はこの話を聞くまでは、障がいのある子どもたちの行動は無意識的なものもある、という解釈をしていました。しかしその話を聞き、実際に生徒たちを観察していると、様々な感情を行動で示している場面が多く見られました。そのとき教員の方々は、一人ひとりに合った対応をされており、「生徒理解」が体現されている場面を見ることができました。また、個々の生徒を理解しようとする教員の態度が生徒に伝わっているためか、学級内で良好な信頼関係が成り立っているということを活動の度に感じています。この生徒との信頼関係を築くということも、「生徒理解」ということに関してとても重要なことであることが分かりました。

次に、求められる教員像についてです。活動の中で、個別支援学級の生徒に対してでも普通学級の生徒に対してでも、教員の行うべき行動は変わらないということを大きく感じました。表面上の姿だけでなく内面を見ることができる教員が必要とされる、ということです。ある日の理科の授業で、本などを見て、自分で決めた魚の絵を描くという活動を行いました。しかし、Kさんという生徒だけ描く魚が中々決まりませんでした。Kさんは普段はあまり自分の感情を表に出さない生徒です。何を描くかずっと悩んでいたため、私はKさんと、どんな魚を描くか一緒に探しました。すると、今までたくさん悩んできたKさんでしたが、私と探しているときに話題

にあがった魚を描く、と数分で決めてしまいました。あまり自己主張の激しくないKさんが、今まで悩んでいたものを即決する姿を見て、表に出さないだけで内心には固い意思があるのだと感じた。このような内面に存在する自分の感情を、表に出せるよう導ける教員に、生徒は心を開き、教員と生徒との間に信頼関係が成り立つきっかけとなると思いました。

上記で挙げたこと以外にも、この学級での生徒への声のかけ方や、生徒同士の関わらせ方など多くのことを学び、自分の中に吸収することができました。個別支援学級だからといって何かが特別というわけではなく、一人ひとりがかけがえのない存在であるということを改めて認識することができました。今回の活動で学んだことを学んだだけで終わらせず、様々な場面で適宜活用できるように自分のものにしていきたいです。



授業見学を通して

電気電子情報工学科 3年 宮田 修斗

六角橋中学校のATのボランティアは、昨年の5月から週に一度行っています。

その活動の中で印象に残っていることがあります。それは、中学2年生の数学の授業でのことです。朝登校した際に、担当の先生にお願いして授業のATをさせてもらいました。その時に、感じたことが2つありました。

まず、授業前の生徒達との会話です。授業開始の5分前に教室に行って、生徒達と笑顔で部活のことや休日になにをしていたか、などの話をしていました。生徒5人が同時に、「先生！先生！」と話かけてくるのに対して、一つひとつの話に笑顔で自然と返していたことが凄いと感じました。ただ授業をするだけではなく、生徒達と直接かかわっていくことで、生徒と教師の信頼関係を作ることができるという事を学びました。

次に、授業中の生徒一人ひとりへの対応です。授業の内容は図形の内積と外積でした。初め僕は、教室の後ろで授業を聞きながら生徒たちの様子を見ていました。すると教室の中で、授業を理解している生徒と、理解できていないだろうと思われる生徒がいることが分かりました。僕は、生徒が問題演習のとき机間指導で、できている生徒の確認と、理解できていない生徒に声かけをしました。その時に、先

生は僕が後ろから見ていて気になった生徒全員に声をかけて、できるようになった生徒に対して「そうだよ！できるじゃん」とできなかったことができるようになったことに対して褒めていました。また、僕が机間指導をしていて他の生徒とは違う面白い考え方をしていると感じた生徒には、その生徒を指名して、「Aさん違った考え方だったよね！どんな風に考えた？」と生徒の素晴らしい解答を逃さずに授業で取り上げていました。授業をしながら、きちんと生徒の様子を見て机間指導でも一人ひとりのことをきちんと見ていないとできないことだと思うので、本物の教師はやはりすごいと思いました。

今回の授業を見て、生徒との関係作りや、授業中でも、生徒一人ひとりをしっかりとみて生徒の発言や生徒の考えを逃さないことが大切だと学びました。

六角橋中学校のATは、実際の学校現場を見ることができると、学べることが多く、教師を目指している自分にとって貴重な経験となっています。また、現役の教師の指導を見ることで、今まで生徒としての立場でしか見ることがなかった教師の姿を、改めてみることができ、教師の凄さや楽しさ、反対に教師の大変さを知ることができました。これからも、この活動を大切にしていきたいです。

発行日:2017年1月20日

発行場所:神大ユース・サポート・プロジェクト(JYSP)

TEL:045-481-5661(内線4352)

FAX:045-413-4154

E-mail:jyssp-jimukyoku@kanagawa-u.ac.jp